

イエスのまなざし【つのぶえ14年10月号掲載】

郡山での暮らしから①

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故から3年半余が経ちました。しかし、復旧どころか山積する問題は深刻さを増すばかりです。

毎日増え続ける約400tの汚染水、相次ぐALPSのトラブル、除染、廃棄物、そして中間貯蔵施設の問題、長引く仮設住宅での生活、故郷へ帰還の問題。そして、心身の健康に関する将来に亘る不安。全ていのちに関わる問題です。

郡山市内を移動していると、あちらこちらで、あってはならない光景に出くわします。「現在除染作業中」の看板の傍で除染作業をしている防護服の人たち。その脇を、無防備のまま走り去る自転車の若者。コンクリートの筒に入れられたまま軒下に積まれている、行き場のない汚染土。市役所や公民館、学校、幼稚園、公園などの公共施設に設けられたモニタリング・ポスト。「○日の県内13地点の環境放射線量測定値」「観光地の放射線モニタリング結果」「放射性物質の検査結果」「災害関連死者数」など、天気予報と同じように掲載される新聞記事。

これらを、否が応でも毎日目にしなければならぬ住民の不安や焦燥は計り知れません。このような非日常が、3年半余りが経過し日常化してしまっています。そうしなければ日ごとの生活を送ることができないからです。

この号を第1回目として6回連続で紙面を頂きました。このシリーズでは、原発問プロジェクトがその活動を通して出会った人々の生活の様子や生の声を届けながら、原発に依存しない生き方を、皆さまで一緒に考えて行きたいと思えます。

(原発と放射能に関する特別問題プロジェクト 池住 圭)



郡山聖ペテロ聖パウロ教会前の道路の除染



教会近くのアパート軒下に並べられた汚染土
(黒いカバーの劣化が懸念されている)



教会近くの公園に設置されたモニタリング・ポスト